

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K22251

研究課題名(和文) 師範学校の「教育効果」に関する歴史社会学的研究

研究課題名(英文) Historical sociology on education effects of normal schools

研究代表者

長谷川 鷹士 (Hasegawa, Yoji)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・その他(招聘研究員)

研究者番号：30878418

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：師範学校での教員養成がどのような「教育効果」を有したのかについては論者によって肯定的な評価、否定的な評価に分かれている。本研究では師範学校がどのような「教育効果」を有したのか、できる限り実証的に検証することを試みた。教育への高い使命感を養えたと言われるが、たしかに高い使命感が養われたと言えるが、教師役割への批判を欠くなど欠点を有するものでもあることを明らかにした。また各科教授法の教育についても、従来評価されるほど、効果的なものではなかった可能性が高いことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後の教員養成制度は師範学校の教員養成への批判の上に形成されている。基本的には今日の教員養成制度は戦前の師範学校での教員養成よりも優れたものと評価される。しかし、教育への使命感形成や教育技術の形成などの点については戦前の師範学校の方が優れていたのではないかという疑義も提起されている。そして、こうした疑義に基づいて、教員養成改革が進展しているという側面もある。

本研究はこうした状況を踏まえながら、師範学校の教員養成の実態の一端を明らかにした。本研究が提起した事実は師範学校との対比で今日の教員養成を考察する場合に、欠くことのできない歴史的知見を提供したと言えるであろう。

研究成果の概要(英文)：The educational effect of teacher training at normal schools is divided into positive and negative evaluations depending on the commentator. In this study, we attempted to verify as empirically as possible what kind of educational effect normal schools had. It is said that he was able to develop a high sense of mission in education, and although it can be said that he developed a high sense of mission, it also has shortcomings such as a lack of criticism of the role of teachers. It was also clarified that there was a high possibility that the teaching methods of each department were not as effective as they had been evaluated in the past.

研究分野：日本教育史

キーワード：教師教育 教員養成 生徒文化 師範学校

1. 研究開始当初の背景

今日の教員養成制度の原則である「大学における教員養成」は戦前の師範学校の教育への反省に基づいて導入されたという側面を有する。ところが師範学校の教育について、十分に実証的な検討がなされたうえでその反省がなされたわけではなかった。こうした事実があるにもかかわらず、戦後教員養成改革の結果、導入された「大学における教員養成」を維持していこうという立場と、戦後教員養成改革は師範教育の実態を踏まえた改革ではなかったとし、その組み換えを主張する立場とが対立することとなった。

前者の代表的論者は海後宗臣であり、後者の代表的論者は横須賀薫である。前者は「師範型」論などの、主に戦前当時の言説に依拠しながら、師範学校では十分な学術的知識を養うことができず、師範学校卒の教員は知識の伝達には長けていたが、知識の創造はできなかつたと論じていた。一方で後者は師範学校では望ましい教育への使命感が涵養できており、教育技術も非常に高いものを形成できていたと捉えていた。学術的知識も学者レベルではないにしても、小学校教育を行う上で必要以上のものを形成できていたと捉えていた。こうした議論の根拠となっていたのは斎藤喜博などの優れた教育実践家を師範教育が輩出していることであった。しかし、どちらの立場も十分な実証的根拠に基づいて、師範教育を捉えているわけではなかった。

筆者はこうした対立が存在するのは、結局は師範学校の教育の実相に関する実証的研究の不備のためと考え、そうした不備の克服を目指して、本研究に着手した。

2. 研究の目的

上記背景を踏まえて、本研究の目的は師範学校教育の実相の実証的解明であったといえる。特に海後と横須賀の評価が対立する部分を検討することとなる。すなわち、(1)師範学校でどのような教育への使命感が形成されていたのか、(2)学術的知識はどの程度、形成されていたのか、(3)教育技術はどの程度のものが身につけていたのかなどを明らかにすることが本研究の目的である。より具体的に述べる(1)については横須賀らが想定するような教育への使命感形成はあったのか、あったとすればそれはどのような教育方法によってなされていたのか、横須賀らが注意を向けていない、使命感形成のマイナス点はなかったのかを明らかにする。

(2)については海後と横須賀の主張が大きく分かれる部分である。まず海後にせよ、横須賀にせよ、師範教育での「教養形成」には否定的な評価を下しているが、その程度はどのようなものであったのか、「教養形成」に対して師範教育はどのようなプラス・マイナスの影響を有していたか、小学校で教える知識にどの程度、習熟していたのかを明らかにする。

(3)については海後にせよ、横須賀にせよ、ある程度の水準があったとみなす教育技術はどの程度のものであったのか、教育技術を養うどのような教育が師範教育にあったのかを明らかにすることとなる。

3. 研究の方法

研究方法については(1)師範学校でどのような教育がなされていたのか、(2)師範学校生徒がどのような学習をしていたのか、(3)教育や学習を通じて、師範学校生徒がどのような資質能力を身につけたのかを明らかにする必要があるため、それに応じた研究方法をとることとなる。すなわち(1)については師範学校沿革誌などを分析し、どのような教育活動が組織されていたかを検討する、師範学校の各教科の教科書を分析し、教育内容を検討する、等の研究方法がある。(2)については校友会図書室の蔵書や利用状況などを分析し、生徒の自学自習の様子を検討するという方法がある。(3)については校友会雑誌の論考などを分析し、生徒に形成された資質能力を検討する方法がある。

4. 研究成果

研究成果としては(1)研究発表2本(うち1本はのちに論文化)と(2)論文3本を発表することができた。(1)については論文化できていないものについてのみ記すと「師範学校における教育観形成に関する一考察」という題で2020年度日本教師教育学会で口頭発表を実施した。研究目的(1)(2)に関わる研究である。師範学校において教育学理論や哲学的知識といった生徒の教育観を形成しうる知識がどの程度、どのように教授され、生徒がどのように身につけていたかを検討した発表である。論文化を目指したが、研究期間内の論文化はできなかった。

(2)は「師範学校における教育への使命感形成」、「戦前師範学校における男女共学」、「現代日本の教員養成制度に関する一考察」を発表した。は研究目的(1)に関わる研究で

ある。師範学校の行事や授業、教育実習などを通じて、どのような教育への使命感が形成されようとしたのか、そして、生徒たちはどのような使命感を身につけていたのかを検討した。横須賀などが指摘する教育への使命感が形成される経路を検討したという点に本研究の新規性があったと考える。また従来、あまり指摘されてこなかった師範学校で養われた使命感の問題点、すなわち、子どもを可塑性に富む対象としてのみとらえようとする傾向を指摘できた点も本論文の新規性であると考えられる。

については当初は想定していなかった研究課題である。しかし、師範学校の教育実態を検討する中でその教育状況が当時、「男女共学」と称されていた事例を発見し、その意義を明らかにする必要があると考え、本研究に着手した。実際、戦前師範学校の教育は男女別学が基本であったが、施設面などの理由から、男女が時間をずらして同一教室を利用する事例などが存在した。結果、教室移動の際に顔を合わせるなどの「交流」を持つ機会も生まれてはいた。しかし、甚だ限定された「交流」であったこともあり、「男女共学」に期待される両性の尊重や健全な異性観の形成などにはつながっていなかったことが明らかになった。

は研究目的(3)に関わる研究であり、口頭発表の上、論文化した。研究の背景で述べたように本研究は現代の教員養成制度を歴史的に見直すという側面も有している。そこで 現代との対比も視野に入れながら、師範学校の教育技術形成の一端を検討した。特に教育実習と各科教授法に着目して分析を実施し、各科教授法については従来論じられるような高い教育技術を形成するには不十分な教育内容であったことを明らかにした。もちろん、教育実習などを通じて、高い教育技術を身につけた可能性は否定できないので、この点については今後の課題として残された。

全体として、研究期間が新型コロナウイルスの感染拡大期と被ったため、予定していたほどの成果を上げることはできなかった。特に全国の師範学校後身学校所蔵資料を収集・分析するという作業にはほとんど着手することができなかった。研究目的(2)は本研究の肝になる部分でもあったが、当初の見通しの甘さもあり、また資料収集の遅延もあり、十分な成果を上げることができなかった。この点は今後の研究活動の中で補完し、進展させていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 長谷川鷹士	4. 巻 23
2. 論文標題 現代日本の教員養成制度に関する一考察 - 戦前の師範学校制度との対比を中心として -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田大学教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 76 83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川鷹士	4. 巻 9
2. 論文標題 戦前師範学校における「男女共学」 - 男女生徒の交流に着目して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本教育史論集	6. 最初と最後の頁 145-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川鷹士	4. 巻 8
2. 論文標題 師範学校における教育への使命感形成 - 使命感形成のための教育活動に着目して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育史論集	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長谷川鷹士
2. 発表標題 現代日本の教員養成制度に関する一考察 - 戦前の師範学校制度との対比を中心として -
3. 学会等名 早稲田大学教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長谷川鷹士
2. 発表標題 師範学校における教育観形成に関する一考察
3. 学会等名 日本教師教育学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関